

書評

重田園江著

『フーコーの風向き——近代国家の系譜学』

(青土社、2020年)

稲村 一隆

本書はミシェル・フーコーの1970年代後半の思想を中心に扱った論文集である。著者（重田）が1994年から2007年にかけて出版した論文8本と数編の書き下ろしから構成されている。ほぼすべての章にコラムが付いており、そのコラムには執筆当時の研究状況や課題が記載されている。コラムを先に読んでから本論を検討した方が著者の意図をよく理解できる。論文執筆当時は、フーコーの特徴がよく把握されておらず、今では活字となっているフーコーの講義を録音テープから理解していた時代だったことを示している。著者たちフーコー研究者の労苦のおかげで、今や当たり前のようにミクロな権力に目を向けられるようになったのだ。

著者によれば、フーコーの魅力は、既存の知の枠組みを批判的に捉え、「現代を説明する能力に長けている」点にある(16頁)。とりわけ第1部(第1～4章)を読むと、近代以降の権力で着目すべきものは、政府の直接的で物理的な暴力や法律ではなく、学校、軍隊、監獄、病院といった施設で、教育や訓練や公衆衛生を通して、人々を規律し、主体を作り上げていく構造や仕組みである。とりわけ統計学の誕生によって、人口が固有の法則を持つものとして捉えられ、出生率、死亡率などの分析を通して管理されることになる。第三部ではさらに現代的なトピックを扱い、必ずしもフーコーが新自由主義を評価していなかったこと、むしろ新自由主義のレトリックを通して不健全な競争システムと管理が導入されていることを語っている。統計学が最強の学問となり、データ・サイエンスがもてはやされる時代の大学生に読んでほしい箇所である(著者の『フーコーの穴：統計学と統治の現在』木鐸社、2003年も含めて)。

政治思想の研究者にとって重要なのは第二部だが、特に第5、6章が分かりにくい箇所である。その理由は著者が以下のような多くの作業を同時

に行なっているからである。フーコーの描く思想史とケンブリッジ学派(特にJ.G.A. ポーコック)の描く思想史の比較、フーコーの歴史分析の方法論とケンブリッジ学派の思想史方法論の比較、上記二つの比較のためにフーコーの描く歴史の要約、二次文献の要約、著者の補足などである。おそらく著者の意図は、フーコーが政治思想史の王道たるポーコックと、方法論の面でも歴史の内容の面でも、類似していることを示すことで、フーコーの描く歴史の妥当性を擁護することにある。著者の意図を実現するためには、フーコーの作り出した物語と方法論に対して批判的となり、どの一次資料がどの主張を論証したり反証したりできるのかを丁寧に検証することではないだろうか。

著者は近現代の規律権力の問題に焦点を当てているが、評者自身はフーコーの分析枠組みは古代へも適用できる射程の広い理論だと考えている。統計学がなかったとはいえ、人口を管理する視点は国家の誕生とともにあったものである。メソポタミア文明の文化人類学的研究によれば、国家と農耕と定住と徴税と疫病がセットであり、人々の生活様式や栽培品種が管理される様が描かれている(例えば、ジェームズ・スコット『反穀物の人類史』みすず書房、2019年を参照)。プラトン、アリストテレスの著作にも、人口と生殖と子育てを管理する視点に満ち溢れ、政治とは動物を飼育する技術の一種という考えもある。ボリスの政治とは人間を家畜化するものである。

本書では『性の歴史』第2巻以降は、1980年代の著作だからか、著者が善手としているからか、検討の対象になっていない。著者は、古代ギリシャのキュニコス派が、主体の形成とは異なる仕方で「自己への配慮」のモデルとなることを示唆しているが(69-70頁)、古代の実態はとても理想化できないものもある(桜井万里子『古代ギリシアの女たち』中央公論社、1992年などを参照)。フーコーが古代に抱いた親密さを問題視することが必要になってくる。『性の歴史』第4巻も刊行されたので、性、結婚、家族制度に関するフーコーの思想史をどう評価できるのかは、著者の見解を参考にしながら評者自身の今後の課題としたい。